

# Hara Museum of Contemporary Art

サイ トウオンブリー:紙の作品、50 年の軌跡

2015 年 5 月 23 日[土]ー8 月 30 日[日] 原美術館[東京都品川区]



「Petals of Fire (炎の花弁)」 1989 年 144×128 cm アクリル絵具、オイルスティック、鉛筆、色鉛筆、紙  
© Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation

## 【概要】

原美術館では、20 世紀を代表する巨匠サイ トウオンブリーの個展を日本の美術館として初めて開催します。この展覧会は、2011 年に死去した作家が生前自ら作品の選定に関わり、 Санктペテルブルクのエルミタージュ美術館、欧米の主要な美術館で開催され評判を呼んだ個展を、当館の空間に合わせて再構成したものです。トウオンブリーの即興性、速度、激情、直感が、いきいきと横溢する紙の作品(ドローイング、モノタイプ)約 70 点が一堂に会し、その 50 年にわたる孤高の画業を紹介する画期的な機会となります。なお、別館ハラ ミュージアム アーク(群馬県渋川市)でも出品作品の一部を展示いたします。

## 【サイ トウオンブリーとは】

サイ トウオンブリー(Cy Twombly, 1928-2011)は 20 世紀を代表するアーティストの一人です。絵画と彫刻の両方で旺盛な制作活動を展開しましたが、とりわけ、《描画された詩》とでも形容すべき独特の絵画作品は他の追随を許しません。アメリカ出身ですが 20 代の終わりにイタリアへ移住し、少しずつ大西洋の両側で孤高のアーティストとして評価を高めて行きました。その世界的な評価は、高松宮殿下記念世界文化賞(1996 年)、ヴェニス ビエンナーレ金獅子賞(2001 年)、レジオンドヌール シュヴァリエ勲章(2010 年)などからもうかがえます。

# Hara Museum of Contemporary Art



「Untitled (無題)」 1970年 70.5×100 cm ワックスクレヨン、ペンキ、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation

## 【本展の構成、成り立ちと意義】

本展は、サイ トゥオンブリーの類まれなキャリアを、紙の作品(ドローイング、モノタイプ<sup>〔注1〕</sup>)によって回顧するもので、1953年から2002年までの50年間に制作した紙の作品約70点を紹介いたします。本展は、2003年に Санкт-Петербурクのエルミタージュ美術館で開催された展覧会<sup>〔注2〕</sup>が原型です。これは、同館初の外国人キュレーターであるジュリー シルヴェスター(現・サイ トゥオンブリー財団)が企画し、トゥオンブリー自身が作品の選定に関わったものです。トゥオンブリーは残念ながら2011年に亡くなりますが、サイ トゥオンブリー財団の全面的協力により、このたび原美術館で開催することとなりました。日本ではいくつかの美術館<sup>〔注3〕</sup>がトゥオンブリー作品を収蔵しており、美術館のグループ展には何度か<sup>〔注4〕</sup>取り上げられてきましたが、残念ながら美術館規模の個展は日本でまだ行われたことはありません。その意味でも、本展の意義は画期的と言えます。

なお、出品作品の一部は、原美術館の別館ハラ ミュージアム アーク(群馬県渋川市)の特別展示室「観海庵」において展示いたします。床の間と違い棚を備えた書院造を引用した和風の展示空間(設計磯崎新)の中で、通常「観海庵」で展示する古美術作品(原六郎コレクション)と、トゥオンブリー作品を対置する形で展示いたします。「手で描く／書く」という表現行為に全精力を傾けるトゥオンブリーの作品が、また違った印象を生み出すかもしれません。東西の文化圏や近世と現代という時代の違いを超えた美の対話をご鑑賞いただけることでしょう。

〔注1〕 原画から転写するという点では版画技法の一種だが、原版から同質のものを一定の数を刷れる一般の版画とは違い、1～2枚しか刷れない。複数の手法があるが、一般的には、金属板・ガラス板などに描画し、インク・絵具が乾く前に紙を当ててプレスし、転写する。

〔注2〕 その後、ボンビドーセンター(パリ、2004)、サーペンタインギャラリー(ロンドン、2004)、ピナコテーク デア モデルネ(ミュンヘン、2004)、ホイットニー美術館(ニューヨーク、2005)、メニル コレクション美術館(ヒューストン、2005)でも開催

〔注3〕 国立国際美術館(大阪)、ベネッセハウスミュージアム(香川)、セゾン現代美術館(長野)、DIC 川村記念美術館(千葉)、いわき市立美術館(福島)、など

〔注4〕 「絵画 1977-1987 開館 10 周年記念」(国立国際美術館、1987)、「アメリカの美術 1945 年以後」(栃木県立美術館、1988)、「戦後アメリカ絵画の栄光 1950 年代/60 年代」(滋賀県立近代美術館、1989)、「現代美術の神話 ソナベント・コレクション」(セゾン美術館、京都国立近代美術館ほか国内巡回、1990)、「芸術家との対話 イヴオン・ランベール・コレクション」(横浜美術館、1998)、など

# Hara Museum of Contemporary Art

## 【その作風】

トゥオンブリーが作家活動を始めた1950年代前半のアメリカでは、ジャクソン ポロック(1912-56)に代表される《抽象表現主義》が美術界を席卷していました。したがってトゥオンブリーは抽象表現主義の第二世代的存在と見られることもあります。ポロックやマーク ロスコ(1903-70)といった抽象表現主義の第一世代は、その初期には直接間接にシュルレアリスムの影響を受け、自動書記(オートマティスム)ふうな描き方をしたり、具象とも抽象とも、あるいは象徴とも記号とも言えるような形態を描いた時期がありました。トゥオンブリーの特色である、一見《子供の落書き》のような即興的作風は初期から見られますが、それに一脈通じるものもあります。

ポロックはやがて有名な《アクションペインティング》へ移行しますが、抽象表現主義の傾向はむしろ、後期のロスコのように、色彩の面の広がりによる画面構築=《カラーフィールドペインティング》に向かっ て行きます。しかしトゥオンブリーは自らのスタイルにこだわり、手で描くという身体的所作によって内なるエネルギーを画面にぶちまけるような即興性と激情性を保持し続けました。特に1957年に拠点をローマに移してからは、60年代のアメリカ美術、すなわち、《ポップアート》や《ミニマルアート》という両極端へ展開していくアメリカのアートシーンとは距離を持ちながら、自分の道を歩み続けました。ある意味、ポロックの《アクションペインティング》の特徴を、アメリカのアートシーンの《外》に居ながら自己流に発展させた と言うこともできます。

ローマに移った後のトゥオンブリーは、地中海の神話や歴史およびさまざまな文学作品(古典から近代まで)にアイデアのヒントを見出します。また一方で、身の風景が作品のテーマになることもありますが、普通の意味での風景画になることは決してありません。トゥオンブリーの絵画・ドローイング作品の画面は、即興的に描かれる線や絵具の飛沫に、文字・数字・記号(神話や文学に由来するものも多い)がランダムに組み合わせられて構築されます。それは、無秩序なようであり、《描画された詩》と言えるような特異なイメージの空間と言えます。

本展は紙に描いた作品にフォーカスしていますが、トゥオンブリーの場合、カンヴァスに描く絵画でも鉛筆を使うこともあれば、紙に描く場合に絵具を使うことも珍しくありません。また、クレヨンや、チョークや、画材ではないいわゆるペンキなどを使うこともあれば、ときには紙の上に紙を貼るなどのコラージュも併用し、材料の選び方は奔放とさえ言えます。また、1980年代後半から最晩年にいたる作品は(絵画もドローイングも)、色彩の使い方において華やかさと激しさを増して行きます。そして、本展で紹介する紙の作品は、トゥオンブリーの即興性、速度、激情、直感などが、カンヴァスに描いた絵画作品にも増してストレートに露出しているように感じられます。

## 【その世界的評価】

トゥオンブリーの一貫して孤高な創作活動は1970年代末に転機を迎えます。1979年、ニューヨークのホイットニー美術館がトゥオンブリーの回顧展を開催し、同じ年に作品のカタログレゾネ(総目録)第一巻も発行されました。同書には、フランスの高名な哲学者・批評家ロラン バルトがトゥオンブリー論<sup>〔注5〕</sup>を寄稿しました。こうしてトゥオンブリーは、1980年代に入って国際的に高い認知度を得るようになりました。そして、1994年に今度はニューヨーク近代美術館(MoMA)で回顧展が開かれ、翌1995年、テキサス州ヒューストンのメニル コレクション美術館に、トゥオンブリー作品だけを展示する別館《サイ トゥオンブリー ギャラリー》がレンゾ ピアノの設計で完成しました。そして晩年は、冒頭にも述べたように、高松宮殿下記念世界文化賞(1996年)、ヴェニス ビエンナーレ金獅子賞(2001年)、レジオンドヌール シュヴァリエ勲章(2010年)と数々の賞に輝き、世界的な美術家として揺るぎない名声を獲得したのです。

〔注5〕 ロラン バルト「美術論集」(みすず書房、1986年)に邦訳あり。

# Hara Museum of Contemporary Art

## 【広報用図版】

\*ご希望の図版番号をプレス担当宛(連絡先は p.6 参照)にお知らせください。

\*掲載時にはクレジットの記載をお願いいたします。また、図版のトリミング、文字載せはご遠慮ください。



図版 A <初期(50年代)の作品例>



図版 B <60-70年代の作品例(1)>



図版 C <60-70年代の作品例(2)>



図版 D <80-90年代の作品例(1)>



図版 E <80-90年代の作品例(2)>



図版 F <晩年(00年代)の作品例>

## [図版クレジット]

- A 「Untitled(無題)」 1953年 48×64 cm モノタイプ、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation
- B 「Untitled(無題)」 1961/63年 50×71cm 鉛筆、色鉛筆、ボールペン、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation
- C 「Untitled(無題)」 1970年 70.5×100 cm ワックスクレヨン、ペンキ、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation
- D 「Proteus(プロテウス)」 1984年 76×56.5 cm アクリル絵具、色鉛筆、鉛筆、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation
- E 「Petals of Fire(炎の花弁)」 1989年 144×128 cm アクリル絵具、オイルスティック、鉛筆、色鉛筆、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation
- F 「Untitled(無題)」 2001年 124×99 cm アクリル絵具、ワックスクレヨン、鉛筆、コラージュ、紙 © Cy Twombly Foundation / Courtesy Cy Twombly Foundation



# Hara Museum of Contemporary Art

## 【開催要項】

展覧会名 「サイ トゥオンブリー:紙の作品、50年の軌跡」(英題 *Cy Twombly - Fifty Years of Works on Paper*)  
会期 2015年5月23日[土]ー8月30日[日]  
会場 原美術館  
主催 原美術館、Hara Museum Fund  
特別助成 駐日アメリカ合衆国大使館  
助成 テラ財団  
企画協力 サイ トゥオンブリー財団

開館時間 11:00 am - 5:00 pm(祝日を除く水曜日は8:00 pmまで/入館は閉館時刻の30分前まで)  
休館日 月曜日(祝日にあたる7月20日は開館)、7月21日  
入館料 一般1,100円、大高生700円、小中生500円/原美術館メンバーは無料、学期中の土曜日は小中高生の入館無料/20名以上の団体は1人100円引  
交通案内 JR・京急「品川駅」高輪口より徒歩15分/都営バス「反96」系統「御殿山」停留所下車、徒歩3分/京急「北品川駅」より徒歩8分 \*掲載時、省略される場合は「品川駅」を優先してください。

原美術館 東京都品川区北品川 4-7-25 〒140-0001  
Tel 03-3445-0651(代表) Fax 03-3473-0104(代表) E-mail info@haramuseum.or.jp  
ウェブサイト <http://www.haramuseum.or.jp> 携帯サイト <http://mobile.haramuseum.or.jp>  
ブログ <http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum>  
Twitter [@haramuseum](http://twitter.com/haramuseum)

ギャラリーガイド 日曜・祝日には当館学芸員によるギャラリーガイドを行ないます(2:30pmより30分程度)

## 関連イベント

「サイ トゥオンブリー:紙の作品、50年の軌跡」開催記念キュレータートーク[予約制]  
出演 ジュリー シルヴェスター(サイ トゥオンブリー財団) 聞き手 安田篤生(原美術館)  
日時 5月23日[土] 2:00 - 4:00 pm  
場所 原美術館ザ・ホール 日本語英語逐次通訳付き  
料金 一般1,000円(別途要入館料)、原美術館メンバー無料(同伴者要参加費)  
ご予約はe-mailにて、表題に「トゥオンブリートーク申込」、本文に氏名、ご連絡先電話番号、人数を明記し、event@haramuseum.or.jp までお送りください。

※他のイベントは追ってウェブサイトほかで発表します。

## 【関連展示】

「サイ トゥオンブリー×東洋の線と空間」(英題 *Line and Space: Cy Twombly and East Asia*)  
2015年5月29日[金]ー9月2日[水]  
ハラ ミュージアム アーク 観海庵 群馬県渋川市金井 2855-1 〒377-0027

別館ハラ ミュージアム アークの特別展示室「観海庵」において、本展出品作品の一部と、東洋古美術作品を対置して展示いたします。和風の展示空間(設計 磯崎新)での、時代と東西の差を超えた造形の対話をご鑑賞ください。(開館時間 9:30 am - 4:30 pm/休館日 6月、7月中の毎木曜日、7月6日[月]ー17日[金]、入館料 一般1,100円ほか)。

<http://www.haramuseum.or.jp>

## 【出品作品数】

約70点(すべてサイ トゥオンブリー財団所蔵)/作品の一部はハラ ミュージアム アークに出品予定。

\*テラ財団(The Terra Foundation for American Art)について

テラ財団はシカゴを拠点にアメリカ芸術の探究と普及を目指す団体です。作品所蔵と公開から始まった同財団は、文化交流を深めるため、革新的な展覧会や研究、教育普及への援助と協力を行ないます。

# Hara Museum of Contemporary Art

## 【サイトゥオンブリー略年譜】

- 1928 アメリカ合衆国ヴァージニア州レキシントンに生まれる
- 1947-51 ポストン美術館付属美術学校、アートスチューデントリーグ(ニューヨーク州)、ブラックマウンテンカレッジ(ノースカロライナ州)などで学ぶ。この過程でロバート ラウシェンバーグやロバート マザウエルの知己を得る
- 1951 最初の個展をシカゴの画廊で開く。マザウエルの助力で、年末にニューヨークで初の作品発表
- 1952 ヴァージニア美術館の奨励金により、初めてヨーロッパと北アフリカに旅行する
- 1953 イタリアの画廊で初の個展。一時期ラウシェンバーグのアトリエを使って制作する
- 1953-54 兵役に就き、陸軍で暗号の作成と解読に携わる
- 1957 イタリアに拠点を持つようになり、同地で夫人と出会う(59年に結婚)
- 1965 初めて美術館規模の個展をドイツのクレーフェルト美術館で開催、ブリュッセルとアムステルダムへ巡回
- 1968 アメリカでは初の大規模な個展をミルウォーキー アート センターで開催
- 1979 ニューヨークのホイットニー美術館で大規模な個展。カタログレゾネ(作品総目録)第1巻刊行
- 1987 チューリッヒ美術館で大規模な個展を開催、その後パリのポンピドゥーセンターをふくむヨーロッパ数カ国の美術館へ巡回
- 1994 ニューヨーク近代美術館(MoMA)で大規模な個展
- 1995 MoMA の個展が巡回したテキサス州ヒューストンのメニル コレクション美術館に、トゥオンブリー作品のみを常設展示する別館《サイトゥオンブリー ギャラリー》がオープン(設計はレンゾピアノ)
- 1996 高松宮殿下記念世界文化賞(絵画部門)を受ける。授賞式に出席のため来日
- 2001 ヴェニス ビエンナーレに12枚の巨大な連作絵画《Lepanto》を出品し、金獅子賞を受ける
- 2003 サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館で紙の作品(ドローイング、モノタイプ)による回顧展を開催。その後、ポンピドゥーセンター(2004)、ホイットニー美術館(2005)、メニル コレクション美術館(2005)その他でも開催し、2015年に原美術館で開催
- 2008 ロンドンのテート モダンで大規模な個展が開催。ビルバオ(スペイン)とローマへ巡回
- 2009 ヴェニス ビエンナーレに出品した《Lepanto》を常設展示するブランドホルスト美術館がミュンヘンにオープンし、その記念式典に出席。同館は多数のトゥオンブリー作品を所蔵し、メニルコレクション美術館と双璧をなす
- 2010 フランス政府からレジオンドヌール シュヴァリエ勲章を受ける
- 2011 ローマで死去



© Sankei Shimbun Co.,Ltd.

Courtesy Cy Twombly Foundation

取材・図版提供などのお問い合わせ先: 原美術館 広報 松浦、野田(担当学芸員 安田) Tel 03-3280-0679 Fax 03-5791-7630  
E-mail [press@haramuseum.or.jp](mailto:press@haramuseum.or.jp) (いずれも広報直通/掲載時には代表番号・アドレスをお用ください)